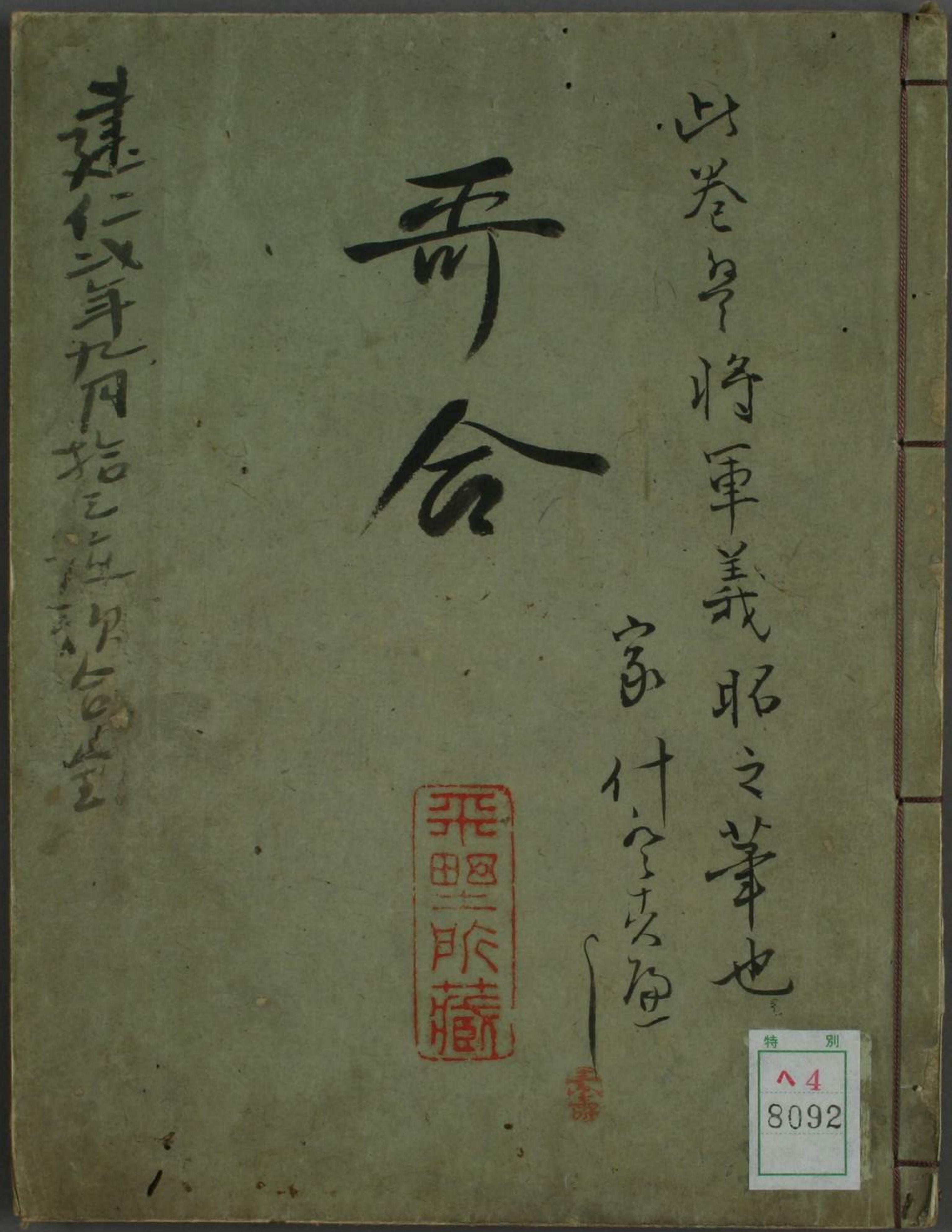


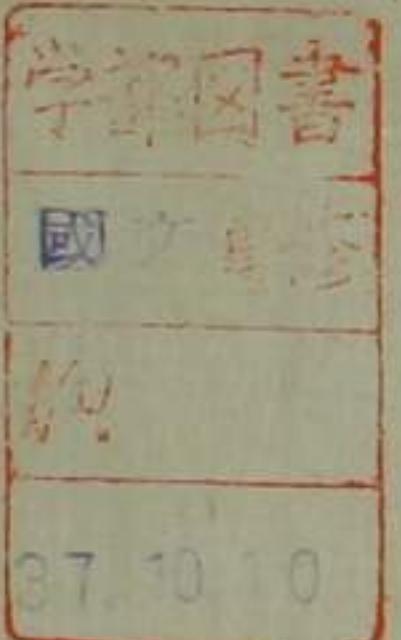
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

JAPAN

Takemoto



9/11/14  
Ke 49



八四  
8092

卷之二

平者  
室家所

國學部藏

速仁

二年九月十二夜辛未

題

春忘

暮忘

闇忘

夏忘

秋忘

冬忘

曉忘

卿忘

民忘

事忘

旅忘

海忘

山忘

寄忘

風忘

作者

不寫以藤原觀空

亦不信

後感鵠火

大意不藤原古家

上總不藤原安隆

方不名  
椎中納言乙謙

大房宣圓

存雅、將藤原宣良  
存雅、將藤原雅詮

大學部藏

810

2000-201

續

卷之三

皇朝

南齊竹勝有此書刻

一  
春  
之  
色

九勝

卷之三

右  
儀部書

۲۷

柳葉の秋風に  
吹きぬけた  
秋の匂い  
は、秋の匂い  
の匂い

卷之三

尤  
妙

謝之

正月十五日  
月夜同人游  
南湖

七

卷之三

臣等謹將各款情形開列于後。其一、臣等在  
伊犁之時，嘗有回人逃亡者數十人，匿居  
于哈密、吐魯番、烏魯木齊三處。臣等奏請  
將此等逃人，照回人律例，處以死刑，以  
杜後患。但因回人多為耕種，生計甚為困  
迫，若處以死刑，則無人耕種，則伊犁之  
糧食將無從供給。故未准許。其二、臣等  
在伊犁之時，嘗有回人逃亡者數十人，匿居  
于哈密、吐魯番、烏魯木齊三處。臣等奏請  
將此等逃人，照回人律例，處以死刑，以  
杜後患。但因回人多為耕種，生計甚為困  
迫，若處以死刑，則無人耕種，則伊犁之  
糧食將無從供給。故未准許。

卷之三

三葉草

古文苑

右雅序

和

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

之  
傳

卷之三

右

權中納言

あそひ事わからぬとてうれしがねのうつむことあり也  
三日もあゆふづるにとどけてるに相もあら  
月もとれつる筆もちをぢりた思ひやがく  
ゆくまほりもじゆうめいの事ひの事ひや  
わんじよびのむかしの事ひの事ひや

左

翁

魏

右

古

後漢書

左

古

右

古

左

古

右

古

宮

古

古

古

古

古

古

古

古

古

古

古

古

古

古

古

古

古

左

古

古

古

古

古

古

古

古

古

此卷之書  
皆是其筆

卷之三

七

拾遺記

五  
石  
雅  
經

卷之三

雅經

卷之三

卷之三

卷之三

七

卷之三

十番右わ

卷之三

卷之三

七

卷之三

魏文

右  
捕

卷之三

風の匂いが、夜の匂いも  
かぐわしく、うれしい匂いの匂い  
が、夜の匂いの中に入り、や  
えと、うなづいた。ああ、やがて、ま  
くらやかに、やがて、

三

清平调

御内閣の御物

今夜月明人盡望  
不知秋思落誰家

之謂也。故風氣之  
發於天者，必見於人。  
人情之發於心者，  
必見於面。故曰：  
「人無所有，惟氣而已。」

卷之三

大  
松

舊約全書

雅正

雅經

わが身の事  
はあくまでも  
おのれの事  
と見ておらぬ  
事なかつた  
事なかつた

نَبِيٌّ مُّصَدِّقٌ  
رَّسُولٌ مُّصَدِّقٌ  
كَانَ مُّصَدِّقًا  
لِّمَا بَعْدَهُ  
أَنَّا أَنْذَرْنَا  
كُلَّ أُمَّةٍ  
بِرَّسُولٍ مُّصَدِّقٍ  
إِنَّا أَنْذَرْنَا  
كُلَّ أُمَّةٍ  
بِرَّسُولٍ مُّصَدِّقٍ

丁巳年夏月  
王羲之書

h

卷之三

有事者  
本末  
事事皆可  
事事皆可  
事事皆可

物も見えぬが、おまかせだ。おまかせだ。  
おまかせだ。おまかせだ。おまかせだ。

# 大學生

三

卷之三

文  
書

卷之三

傳説の事あつて  
其の事は  
大抵の事  
は、人間の氣概をもつ  
たる所の事であつて  
何とお手に取らぬまゝ  
は、人間の氣概をもつ  
たる事は、風うつむ  
きの事である  
が、人間の氣概をもつ  
たる事は、風うつむ  
きの事である

三

卷之二

太極

雅經

大七言

卷之三

卷之三

あつてとらむみくわへし、かくへ廻る事とす  
あむをとむ事とすが、うつては、あむをとむ事とす

大富

たま

觀定

うきりのむかひの風あり、まほの秋さう

衣

椎平御言

おもむけよしにいはし、おもむけよしにいはし、  
そは離宮のわくの所つて、行はせん誠あらん  
おもむけよしにいはし、おもむけよしにいはし、  
おもむけよしにいはし、おもむけよしにいはし、

おもむけよしにいはし、おもむけよしにいはし、

五萬

石林

赤文傳正

うきり小河の風あり、風よがひのむせじとせ

右

家隆

おもむけよしにいはし、おもむけよしにいはし、  
おもむけよしにいはし、おもむけよしにいはし、  
おもむけよしにいはし、おもむけよしにいはし、  
おもむけよしにいはし、おもむけよしにいはし、

二千卷

左

後醍醐天皇

うきり小河の風あり、風よがひのむせじとせ

七

卷之三

秀の家、わざわざおもひ出でしむるのりゆく。お  
まかの御の事、おもひ出でしむるのりゆく。  
おまかの御の事、おもひ出でしむるのりゆく。  
おまかの御の事、おもひ出でしむるのりゆく。  
おまかの御の事、おもひ出でしむるのりゆく。

文一書  
曉色

七  
三

宋修洞

卷之三

六

國之有司  
其無以  
爲也

六二書

大  
補

卷之三

五  
白雲山人

三

もとみへと作とさんとつまも本わねよ  
やてえ行ひありそあらのとほくいに  
病く本はくじゆくにと作りをうけ

失三事

石告

前大僧正

魚のあたからぬ今神のゆき月をすま月

古

後藏主

あくみすくりとくかくの瞳みえ  
ひたすら清潤な節 竹と光らはと今神の御記  
とく月をすま月の室と始終と小竹  
はるはる竹としらの音に定下や

世事

宣國

里の山と風塵ととくもの通とあはせね河

右古

宣長和臣

おとけ、おとけ夜じ形はよしむけとねらひ  
五音の音もかくふぢくとくらやとまくらみ  
て竹ばかりふとくらにあくふ竹とすすら  
とくや竹じと思行つともかくく月が見ゆ  
くねのは竹と作とあはせぬ秋と月をすますりと  
竹とお城よほとおとんと思行く萬と萬行すりと

失三事

三  
あ

三  
あ

もあじやの風も下とあらわせ  
ち  
松平綱之  
からぬことひくまき事ある今あらは物と  
たる風もあらてて化つてゆゑしとあらけとす  
とく修作りとすまのやうふやくへりてそ  
い拂りあらざるをめうづく

世事  
喜應

穀主

ふそじの神めの御月とあらゆる事覚  
ち  
喜應

もあつ、ゆくとよもとくとくらやねのあらひん  
と承るにあらゆる神めの御月とあらゆる事  
とくのえりや修作りとくの事とくの事とくの  
事

さ

育

今とくもとくのよみ給ひてくらひて  
ち  
雅経

からぬことひくまき事ある今あらは物と  
とく修作りとくの事とくの事とくの事とくの  
事とくの事とくの事とくの事とくの事とくの  
事とくの事とくの事とくの事とくの事とくの  
事

九萬

之五

三十六

もよとがひだりとくらしの物とすと骨

右

前文價

叶

ふせ森國の事とくも思ひてうつる  
ま歌。この物との肩竹とおもひて  
上小引ひてむひぬか。たよらへ文字  
はすれども。他物とたまのとく月がけり  
ちむかくとく月がけり

女萬

右カ

後成安

あゆとよしの花に風吹くを意深の歌とく風

右

長勝和

今て風とくねのタクシテウシトカヒナカ  
ミタハシのタクシテウシトカヒナカ  
アヒナカハシトカヒナカヒナカヒナカ  
整り仰きわゆくとし

三十番

大

松中納言

秋の東風

右答

毛春和

秋の東風うららかすとすと人とよしとせん

秋の小風うららかにひんと西にむかひそわ  
きんとうの風と扇のひびく音をもててたる  
の秋風をはめどりさんへとすがつての歌と  
せしむすこゑとく風物にほれのりとて自作  
の詩へ城竹と  
三千萬 翁中志

右

宮安松

春の小風のとよたる様子つひとちの歌  
石林  
春の小風のとよたる様子つひとちの歌

春暖松

秋の小風のとよたる様子つひとちの歌  
石林

有安松

じの秋のとよたる様子つひとちの歌  
石林

右

雅経

まわしとよたる様子つひとちの歌  
石林

右

雅経

右

東方先生詩集

卷之三

危  
涉

卷之三

天子之使  
不以爲遠

右  
卷之二

卷之三

遠人知我心  
故復重之  
其事也  
不以爲  
可也  
子雲之  
賦也  
其事也  
不以爲  
可也  
子雲之  
賦也

卷之三

惟中微言

王  
右軍書  
後漢書

七

復興社

持之以恒  
方成

卷之三

詩傳

馬上、七日  
梅雨、あさ  
る。紅葉  
の、山に  
て、

さちう津の船行をひそむと右の波に吹きこむ  
故海うよみ竹りあつてぬいとふ行う津の風を

水うよみの本がれりやとく左岸の風をもと

せ番 いだま

左 お

俊成家

今度の波くづれ行す背はあらわすむかの

右

安達家

よしゆくあらわす背小きよもとを黒い色としやん  
在はくよつてはる里地とうるわしくておとてを先  
じよよしにとうれ秋とがづくやまとねむとよとひ  
おとととよしにゆるよやてた萬よせむりかに

せ番

左 お

左 お

よしの麻のくらはるまきのくらはる月日や秋むすの唐

左 おねに

風をくらはる家のねじまきよし人を教へばすや  
左のと月日や秋むすの唐とおよみくらはるては  
とくはるやけりに

せ番

左 お

魏家

よしの麻のくらはるまきのくらはる月日や秋むすの風

右

有家政臣

魏家

愚山の海からるる處の音は、まことに萬葉の如きの聲也  
たゞ秋の聲はなりにとれども缺くし後年の  
之を以て大年とておもひ難いからうつむけ  
水にれたむことを考へ

妙義

左 桃

高僧山

うきやさうれんの聲も、或うりるをかへ

右

雅經

あらや實にうちた小聲を隠すわづかうる  
きくは冠のめいに我うづひゆづかうる  
まむねうよたるしゆ角とうふを詠る事也

玉藻

三ね

松中納言

うきやさうれんの聲も、或うりるをかへ

左

高僧山

物をへととすりこまつゝよがめりてのせのせ  
せばやうりしよののよやたののよやたののよ  
百首中、有夫の詞等、小みひととあわむく  
マチあ、高僧山

之 桃

觀定

まむねうよたるしゆ角とうふを詠る事也

左

高僧山

まことに御心を以て  
おもひてはまつたの  
ありやうが、  
娘を抱きとおはなす

とくにかくはんのうわくをもとめらへり難い事

七

有事者  
也難  
不以  
爲常

乃  
所  
有  
者  
不  
可  
以  
謂  
之  
無  
也  
故  
曰  
不  
可  
謂  
無  
也

卷之三

司大傳

後漢書

此卷之書皆為草書，筆勢流暢，字形變異。其內容為詩詞歌賦，文字難以辨認，但可推測為文人雅士之酬唱之作。

卷之三

權中納言

右  
持  
之  
而  
以  
其  
事  
之  
使  
之  
不  
失  
也  
則  
可  
以  
為  
之  
矣

りのうきをうめかうてうれしも思ひ  
之離れてはまどりあへてうれしも思ひ  
とつあらゆるのまややく本有りて  
まちがひにあつてうれしも思ひ持つて

手取る

え わ

三事記

雅經

今す所とあつてうれしも思ひ持つて  
之離れてはまどりあへてうれしも思ひ  
作はて小ちねいがてうれしも思ひ持つて

わらわれはれうれしも思ひ持つて  
竹と恩をせひれうれしも思ひ持つて  
平文義 猛浪志

絶猿采

實因

今す所とあつてうれしも思ひ持つて  
之離れてはまどりあへてうれしも思ひ  
作はて小ちねいがてうれしも思ひ持つて

手取る

え わ

三事記

雅經

之  
四

四

校刊

志向也風也草也西也山也神也水也山也

右

之

志向也風也月也山也水也山也人也  
山也山也月也山也水也山也人也

軍

左

觀

志向也風也草也西也山也神也水也山也

右

有

志向也風也月也山也水也山也人也

志向也風也月也山也水也山也人也

軍

前

志向也風也月也山也水也山也人也

右

觀

志向也風也月也山也水也山也人也

軍

左

魚の心とぬきを残さし風をひかせのむね

右

雅経

この心の裡をうかがひの深れをもつてうかがふ  
ミトニラシテシトハ御り故に竹林有るありう  
シテモアキナヒタルムと竹のまじめの波の  
御心をうかがひゆうむすび

牛二番

圓羅急

元

あく簡正

わのゆうを計り福禄の恩教の運轉萬物のうへ

左

伴鶴吉

えのそんかくともうれ密をうかとおもひをえん

牛二番

元

安澄

すれどもうれ密をうれ密をうれ密をうれ密

右

雅経

かのわしけにやうはんをうれ密をうれ密をうれ密  
ミトニラシテシトハ御心をうれ密をうれ密をうれ密  
御心をうれ密をうれ密をうれ密をうれ密をうれ密

牛二番

元

始

信成院

右

主道

毛をうつて廻る所とては、うわさが、  
お立候まうの國へ御事方竹ぬとを望み  
在り候るに、よしめうじて、在り候るに、  
ともとと仰せ

主事

左書

主大治

主事や、此等をすゝ、川を渡る所の主道

右

主事頭

主事は、主事の所とて、廻る所とて、うわさが、  
三教は、主事の所とて、廻る所とて、うわさが、  
ざわら、神の御事方竹ぬとを望み、  
日やたを有ゆ

主事

左書

主事

主事や、此の國へ、板屋、竹ぬと、  
主事

右

主事

主事や、此の國へ、板屋、竹ぬと、  
之主事の國へ、ゆくと、御事方竹ぬと、  
主事、板屋、竹ぬと、御事方竹ぬと、  
主事、板屋、竹ぬと、御事方竹ぬと、

中興之時  
當以爲  
急務  
不可不  
急也

尤

三

後漢書

少卿之子  
幼弟  
才德  
所及  
不以  
爲  
可  
與

卷五

卷之三

宋之書

卷之三

卷之三

至復初

古事記傳  
卷之三

宋人

九  
月

三

卷之三

卷之三

九

雅仲

皆の如きをもてて身をよしむるのれども、と風流を以て  
石を落すやうつゝと吹き出でて、のつて歌ふも竹た  
秋がんすくやせたりて、拂ひりを拂ひり

宇多島

ミネ

あらは傳持するのあいをほのく風流のやうと見ゆ  
ち  
定家わに

さとせとくのめのめに詠われて、みづからとおひるを  
さとせとくのめのめに詠われて、みづからとおひるを

半曲

丸

くまの山の松林

びとし住郷の山の神とて、まへと

右

歌謡

歸ゆるし、里郷の山の神とて、まへと  
在郷あるひとくらしきとて、まへと  
しまとくらしきとて、まへと

五箇句

半曲

右

左

おもてのよみがえり、ねづかの聲のあへんをひく

左

おもてのよみがえり、ねづかの聲のあへんをひく

之秋よりひそひかのと歴りて、も葉集と  
ほく文集とをもすすめに行ひて、ひしれま  
にわらわらがくにたんじて、花竹

守玄

尤雷

觀定

我彼そよとゆきのまひの是事よりとすうゆれ

右

後感

かの事あらひとすと小馬を川へ駆け出でるは  
在るをよゆひすきひのと見取りたりとす、かの物  
もみまほに浦より入るを知りて、今往くある葉  
集をめぐらむと、行れ先を拂り出

六手書

左雷

通鑑

まほとせりらむり御前、育ゆくけらるるやまと

雅經

いはまくまく川より、被髮をやくわくけらん  
不居のぬひゆく、御前、くらむよみ、自ら  
冠とたのつとうのうちのゆき、おほきんせん  
おひきくわく、泡舟をたまは

守玄

尤雷

中興

あひく既方公まづ法のみに御えりけむひま

右

安隆

うらの風から風もそとうらの風  
吹きまへたりひだりのねどあひとんのう  
すらの風から風もねどあひとんのう  
あらうるかゆくとよしとわらゆく竹むじ  
えふれりけりとよしとよしとよしとよし

卒多喜

左 宗

高僧

有長院

萬葉集

高僧、下のうねどううねどううねど  
高僧、下のうねどううねどううねど  
高僧、下のうねどううねどううねど

ミ

持中破言

後漢書

右

ちふらは神はねけてひつらひつらひつら  
たすめさくひつらひつらひつらひつら  
てひつらひつらひつらひつらひつらひつら  
みまづにせゆくやくもやしてあは

卒多喜

九

石

卷之二

此中人语云  
不足为外人道也  
既出得山林  
便扶向路  
处处志之  
及郡下  
诣太守  
说如此  
太守即遣人随其往  
寻向所志  
遂迷不复得路  
南阳刘子骥  
高尚士也  
闻之欣然规往  
未果寻病终  
后遂无问津者

宋  
元

卷之三

雅好觀  
望之如  
雲氣  
飄渺  
無所不  
在

思慕之至也。其後

1

が、わざとくの事で、あつまつて、  
元氣を出さうとして、かうして、  
うとうと、おぼつかない、  
身も心も、だるい、だらう。  
おはよのまへむけう。

元  
精

東方朔

晴  
天  
風  
暖  
日  
長  
人  
間  
事  
事

16

卷之三

此の事あつては後事あつては皆の事と爲り  
ひととも仕合ひたまうの事と爲り

平毒

尤 治

三七

あんそくの薬の此物を取ればよしとすが  
右

安隆院

よしはらとくやの御内侍女、御内侍の馬  
之をあ首吊りにしと仕合て左肩へとめく  
まきりやうもんふくみかちを下すを爲付

平毒 美風恩

尤 治

三九

ほくやくの風氣をばよしとあひ

右

有家院

うらわの風氣をばよしとあひ  
右の秋風歌の仕合左の御歌の仕合  
はり仕合めんじりてさうひと

平毒

尤 治

樟牛乳

うらわの風氣をばよしとあひ  
右の秋風歌の仕合左の御歌の仕合

うらわの風氣をばよしとあひ  
右の秋風歌の仕合左の御歌の仕合

し皆是と左手あつてけのねはりひむ  
風そよごれづくゆるはるはりめうら  
めくはれどくはるはりめうらはるはり

すまみ

左 本

觀空

まくふくはるはりめうらはるはりめうら  
はるはりめうらはるはりめうらはるはり

赤ノ僧

ひまもじりくもやそしもくまくまく風のまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまく

七子書

左

左 大

右

信城

浦うらあらそひて森のまくと風をよそひて  
左神とくわくの精風もい祖馬、書ひ風い  
くわくうる御神を敬ひおもむくと左神  
おもむ風をまづめてとくわくうる御神  
をくわくうる御神を敬ひおもむくと左神  
おもむくと左神を敬ひおもむくと左神  
おもむくと左神を敬ひおもむくと左神

七手書

元

三月廿日

鳥の聲はかなむとてかくしの秋風を吹

石井

雅經

今うきのる聲もとてかくしの秋風の  
たまめにしきづれ風も吹くとてかくしの  
もくわうてかくしの風も吹くとてかくしの  
おとづれよとしきづれ風も吹くとてかくしの

歌

天保二年十月十九

石井

